

---

# 天才と自殺

Mr.あいう

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天才と自殺

### 【Nコード】

N1966I

### 【作者名】

Mr. あいう

### 【あらすじ】

天才は、この世界に飽き飽きし、遺書を残して自殺した。

天才は、あの世界にも飽き飽きし、遺書を残して自殺した。

天才は、あんな世界にも飽き飽きし、遺書を残して自殺した。

天才の、遺書でつづった物語。

まあ、自殺するわけだから、遺書を書いておこうと思う。  
まず最初に、俺は天才だ。

これは、別に俺が極度のナルシストだから言っているのではない。  
まあ、俺が極度のナルシストであってもことうだろうが、それは  
水掛け論というものだろう。

しかし俺の遺書を最初に見つける俺の秘書をはじめ、俺の知り合い  
が全員納得してくれることと思う。俺は正真正銘筋金入りの天才な  
のだ。

生まれたときから抜群に記憶力と発想力と想像力と運動神経がよか  
った俺は何をやっても一番だった。

小学一年生のころの50メートル走では学校で一番早かったし、  
中学一年生のころ、遊び半分で一億の賞金がかかった数学の問題を  
解いてしまった。

高校一年のころ……はなかった。

外国の大学に特待生として迎えられたのだ。

まあ、仕方がないから三日でその国の言葉をマスターして行ったと  
きには、少し現地の通訳の人間に悪いことをしてしまったと思っ  
たけども。

そして、現在俺は20歳になり、自分の会社を立ち上げてわずか3  
年で世界有数の大企業にのし上がっていて、最上階の自分のオフィ  
スの開け放った窓から外を眺めている。

まあ、散々自慢話が続いたが、最後に俺の自殺する理由について書  
き記しておこうと思う。

「大企業の社長、なぞの自殺！」なんて記事が明日の朝刊の一面を飾るのはごめんこうむりたい。

つまり、この世界がつまらなくなったのだ。

俺は何でもできる人間である。

攻略本を見ながらゲームをしているようなものだ、実際。

というわけで、これ以上生きていてもまあ面白いことなどないと思うので、まだ言ったことのない死後の世界というものがあるかどうか試してみようと思った、それだけだ。

さて、それではさようならこの愛すべき世界よ。

P・S

今まで尽くしてくれた私の秘書に恩返ししようと思う。

私の机の引き出しを見てくれ、俗に言うタイム・マシンの作り方、それと時間移動の注意点が書いてある紙が入っている。君ならうまく使いだろう。

それと、代わりとってはなんだが俺の死体は地上三十階から地面に叩きつけられてみる影もないだろうから普通に捨てていてくれ、葬式もやるなよ。金の無駄だ。じゃないと化けて出るぜ。よろしく。



さて、俺はまた自殺しようと思う。

全く、一生のうちにも二回も遺書を書く羽目になるとは思わなかった。

まあ、この天才の俺が自殺に失敗するわけもない。

完全に死ねると計算したからこそ、自分のビルの30階から飛び降りたのだから。

つまり、俺は死んだにもかかわらずもう一回死ぬということになるのだろう。

この絶対矛盾をどう説明するか？理由は簡単、死後の世界というやつが本当にあったのだ。

俺がもう死んだかな〜と思って目を開けてみると、白いスーツを着た男が目の前にいた。

俺が自殺したのだから死にぞこなったという可能性は万に一つもないと考えて、どういう状況なのかを冷静に分析していると、その男がこう言ったのだ。

「オ、目を覚ましましたな」

見ればわかることを繰り返すやつは好きではないので、俺はすぐにこいつのことが嫌いになった。

その男はなぜか裸の俺に自分の着ていると同じ白いスーツを俺に渡して、着るように言った。

そして、俺が着ている最中に簡単な説明をしてくれた。

俺は初めて自分のおかれている状況がわからなくなっていたが、わかってみると簡単なことだった。

どうやら人間の考えている天国という機関は本当にあったようだ（このときばかりは俺は人間の想像力の豊かさに感心した）。

まあ、しかしその実体というのが本当にくだらなものではあったのだが。

まず天国にいけるのは生きているときにいい行いをした人間というのは嘘っぱちだ。

現に自殺なんかした俺が天国に来ている。

そして天才であるということくらいしかとりえのない俺がなぜ天国にこれているのか聞くと、

「いや、最近天使も人手不足でね。ちよくちよく才能のある人間雇わないと仕事がさばききれないだよ、なんせ最近何かにつけてみんな神頼みなんて行為するでしょう？昔は年に一回の儀式のときにしか、神に祈らない人間がたくさんいたんだけどねえ・・・」

ようは「困ったときの神頼み」を扱うところのようだ。

そしてその天使は一通り説明し終わるとパソコンが置いてある部屋に俺を連れて行った。

そして電源の入ったモニターを指差してこういう。

「これに神に頼んだ人間が次々出てくるから、その願いが順当なものであれば大天使機構に回す。ああ、でも最近じゃめったに順当な願いなんて見ないから、流すだけでいいよ、賃金は願い100につき贖罪ポイントが1ポイントたまっている仕組みね、あんたはあんま悪いことしてないから150年位で人間界に戻れると思うよ、じや、最初に「人でもわかる天使の業務」のプログラム見て、それでもわからないことがあったら俺に聞いて。普段はうえの階にいるから、じゃ、ガンバ」

まあ、天国は実に面白みのないところだった。  
一応、四次元空間に属していて、最初は驚いたが、2日で飽きた。  
神様には一度会っておきたかったが、あまりにもつまらない世界なので自殺しようと思う。

と、そういうわけではじめてきたときから自殺を決意していたのだが、あいにく天国で本当に自殺できるのかを確かめると、完璧に死ぬ舞台を用意するのに約一ヶ月かかったので、少し天国を見て回ったのだが、淡泊なところだった。

一言で言えば、白かった。

こうして俺は白い天井の白い梁から出たロープを眺めながらこの遺書を書いている。

P.S

なんかやたらテンションの高かった天使。

暇だったのでパソコンに天国の業務の簡略化を可能にするプログラムを入れておいた。

これで少しは仕事がかどることと思う。

あと、そのプログラム500ヨタバイト(2の80乗)あるからとりあえず天国のメインプログラムにハッキングしてそこに入れたい。それ以外のプログラムは俺が死んだ直後にきえて、新しいプログラムに移行するから、神様に説明よろしく。

しかし天国が四次元で助かった。おかげでやりがいのあるプログラムが出来た。礼を言っとく。





三度目ともなると、遺書の書き方もさまになってきた気がする。  
まあ、人に見せたり感想をもらったりは出来ないので、あくまで自分としての意見だが。  
さて、ここは地獄だ。

真正正銘地獄に叩き落されたわけだ、まあ、そりゃあ一回連続で自殺したら地獄に叩き落とされるのも当然なのだろうが、それにしても鬼という者ほど話が通じるものもないだろう。  
えらい事務的のところなのだ、地獄は。

「え……と、あなたの贖罪ポイント残り230ポイントです。次の地獄、叫喚地獄に移動してください、次の方へ。ああ、どうも新規の方ですか贖罪ポイント残り……1300ポイントですか。  
なるほど、天国に特例として雇ってもらっていたのに、そこで自殺とは珍しい、最初の地獄は……」

といったカンジで、天使なんかより非常に好感が持てた。  
だが、ここでは少し困ったことがあった。  
何しろ地獄なのだから、絶対に死ねないのだという。だが、地獄に行くという体験も乙なものだった。痛みというものに少し耐性も出来た気がする。

そこは案外刺激的なところだったが、俺はそのときには死ぬことに  
病み付きになっていた。

死ぬたびに別の世界に行く感覚はある種麻薬に近いものがある。

俺は苦心して、地獄で死ぬ方法を見つけ出した。

そして、現在。

ああ、というかこの遺書を書いている時間さえもつたいないのでひ  
とつだけ。

自殺なんかするよりくなことがない。

死ぬことを目的として生きていくのは確かに愉快だ。

だが、それ以上に孤独だ。

死にたいやつほど、変な形で長生きするものだ。

例えば、俺のように。

さて、次はどんな世界だろう。

願わくば、楽に死ねる世界であることを望む。

P・S

地獄にいる、これを読んだやつ。

この遺書、うまく書けているかな？

(後書き)

ジャンルが全くわからない、微妙な作品に仕上がりましたが、それでも呼んでくださってありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1966i/>

---

天才と自殺

2010年10月10日02時12分発行